

March - 2006
No.32
NEWSLETTER
Kyoto International Cultural Association, Inc.

(財)京都国際文化協会

京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館116号
TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006 〒606-8305
e-mail office@kicainc.jp
URL http://kicainc.jp/

会長 西島安則 ・ 理事長 千玄室

2005京都国際文化協会
エッセーコンテスト
私の見た日本



Ms. Jerasakanon at Forum

第28回エッセーコンテスト(京都国際文化協会主催、独立行政法人国際交流基金京都支部・京都府後援)には、日本語の部15編、英語の部21編の応募がありました。9月25日(日)午後、過日の審査で選ばれた優秀作6編の著者が京大会館に集まり、日本語の部、英語の部でそれぞれ発表を行い、続くフォーラムでは選考委員や会場からの質問に笑顔で答えました。各部3人に「京都国際文化協会賞」と副賞5万円が贈られました。入賞作品は次の通りです。

日本語の部「京都国際文化協会賞」(3名)

- 「揺れ動く私の日本観」ソニア・エネヴァ(ブルガリア)
「日本美術における時間と空間 絵巻と建築を中心として」朱琳(中国)
「日本への憧れと夢」楊悦(中国)

英語の部「京都国際文化協会賞」(3名)

- 「日本にて 内観の旅」イレーネ・イレーラ(ヴェネズエラ)
「日本文化と四季」ファンダウ・ジェラサカノン(タイ)
「人間の価値 祖父と私の体験から」デイビッド・モートン(カナダ)

入賞エッセー6編は12頁以降に掲載していますが、各エッセーの要旨を続けてご紹介します。

KICA Essay Contest: Japanese Culture, My View

KICA happily received 15 entries in Japanese and 21 in English to our 28th contest, supported by the Kyoto Prefectural Government and the Japan Foundation Kyoto Office. On Sunday, September 25th, the authors of the six selected essays presented their essays at Kyodai Kaikan and, then participated in the discussion sessions, one in Japanese, and another in English. They enjoyed exchanging their thoughts with the audience and the members of the selection committee. They were awarded with the KICA Prizes with 50,000 yen supplementary prizes.

Prize-winning Essays in Japanese

- “My Swaying View of Japan” Sonya Eneva (Bulgaria)
“Time and Space in Japanese Architecture and Picture Scrolls” Zhu Lin (China)
“My Admiration for Japan, Lost and Regained” Yang Gyue (China)

Prize-winning Essays in English

- “Japan: An Inward Journey” Irene Herrera (Venezuela)
“Japanese culture: the changing of four seasons” Fundow Jerasakanon (Thailand)
“The Value of A Human Being” David C. Moreton (Canada)

Following are the summaries of the six prize-winning essays. Complete essays will appear on page 12 through 31.



Ms. Sonya Eneva (ソニア・エネヴァ)

「揺れ動く私の日本観」 ソニア・エネヴァ

ブルガリア出身のエネヴァさんは幼い時に父親から日本出張の土産に贈られたキッチンセットがきっかけとなり、もっと日本を知りたいとソフィア大学日本学科へ進学します。今回は京都大学日本語日本文化研修生として1年間の予定で来洛しました。

従来の彼女の日本観を変える若者ファッションや人気グループ「オレンジレンジ」にここで出会います。チケットが手に入らず、ライブ行きの夢がかないそうにない失意から立ち直れたのは沖縄旅行のお蔭です。美しい自然と陽気な人々がまるで彼女に魔法をかけたようです。京都に戻り、コンサート当日の会場でダフ屋を探します。所持金は1万円。ダフ屋と開演直前に会う約束をして、ファーストフード店で200円使ったばかりにその約束を反故にされてしまいます。涙の向こうに日本人にチケットを売るダフ屋の姿がありました。悲しくて、「外人」として彼女を拒む様々な場面を思い出します。けれども翌朝、思いを改めます。キッチンセットを手にして以来、ずっと日本が好きなのだから、少々には目をつぶろう。大勢の日本人と会い、実際に見て知った日本は感動がいっぱいでした。

「日本美術における時間と空間 絵巻と建築を中心として」 朱 琳

日本の漫画やアニメーションは今や世界的に有名ですが、絵画を通じて物語を理解する志向はすでに12世

紀の絵巻物に見られます。朱さんはこの総合的芸術作品である歴史資料を読み解く時、「時間と空間」の表現に注目することが有効なアプローチだとして、3つの視点を挙げます。

その1、絵巻の形式に見る時間と空間。形式は中国の画卷を手本としていますが、時間・空間の表現は独特です。床や見台に置いて60cmほど開き、見終わると右手で巻き取れば、場面が変わります。『信貴山縁起絵巻』では、部屋を分けて幾つか場面を描いて見せたり、背景の中に同人物を繰り返し描いたりして物語を展開させます。

その2、絵巻の画面に見る時間と空間。『源氏物語絵巻』には垣間見場面が頻出します。日本では、内と外を明確に遮断せず、御簾、几帳、屏風、襖、障子などの調度で「区切りながらつなげる」曖昧な空間が独特です。四季表現も重要な時間表現です。

その3、日本の建築にみる時間と空間。日本文化は異文化を折々に吸収して、時間の流れに従って積層させた集積回路のような存在だとの見方がありますが、建築様式はその空間構造と見ることができます。日本美術における時間と空間の表現に独自性を見る朱さんの興味は尽きることがありません。発表では集めた資料の数々をコンピュータ画像で紹介しました。

「日本への憧れと夢」 楊 悦

楊さんは7歳の頃、富士山を背景に着物姿の女性が優雅に微笑む絵葉書を見て日本に憧れ、将来は教師を目指して来日しました。

しかし夢と現実は大大きく違っていました。着物姿は珍しく、混雑した車中で化粧をする女性や花見でもないのに地べたに座り込んで騒ぐ若者たちにあきれます。富士山はごみで傷を負ったようです。楊さん自身、日本語特有の曖昧な物言いや敬語に戸惑い、冷たい食物や生ものが苦手です。帰りたいたいと思いつつ彼女に鼓の先生が、「帰ればいいでしょう。簡単なことです」と突き放します。この言葉に奮起して、それから毎月1回、先生の家で鼓の稽古をしています。着物を着て、丁寧な日本語を話し、美しく振る舞う理想の日本をそこで見つけました。稽古を続けるうちに、周りが彼女の変化に気づきます。「日本人みたいになってきたね」。誉

め言葉ですが、うれしくはありません。今のままの私で、日本社会の一員になれませんか。中日間には様々な問題がありますが、日本が本当の意味で国際社会になるよう期待しています。



Ms. Zhu Lin (朱琳)

「日本にて 内観の旅」 イレーネ・イレーラ

イレーラさんが来日したのは、何度も繰り返し読んで憧れた『源氏物語』の世界を求めてでしたが、実際に彼女を迎えたのは、異常なまでに疎ましい現代社会でした。この不快で煩わしい日本社会に向かい合うことになって、禅に心を惹かれていきます。禅に出会ってからは精神も落ち着き、感覚も研ぎ澄まされていきます。そして「空」の意味するところを、そして「束の間の生」を悟るようになっていきました。しかし、イレーラさんの精神に起こったこの変化は、同時に精神の危機でもありました。なぜなら日本の社会で尊重されている価値の多くは、彼女の故国ヴェネズエラでは軽んじられていたからです。時を得た行動、法を守る精神、遠慮深さなどは日本でこそ高く評価されているものの、ヴェネズエラでは世間知らずの仕業としか受けとめられていないからです。日本と出会うことで悩みを深くした彼女でしたが、悩みの果てに新しい理解が待っていました。すなわち、どんなに大切な文化

“Japan: An Inward Journey” Irene Herrera

Irene arrived in Japan in search of *Tale of Genji*-like serenity and instead came face to face with the alienation of modern Japan. Confronted by an unpleasant and jarring side of Japan she turned to *zazen*, which calmed her spirit, honed her senses, and awakened in her an appreciation of the emptiness and ephemerality of life. But this spiritual change was at the same time a spiritual crisis: many of the values esteemed in Japan were looked down upon in her native country of Venezuela. Timeliness, adherence to social rules, reticence, while held in high regard in Japan signaled little more than social naïveté in Venezuela. Ultimately her sense of crisis evolved into a new understanding that one's cultural condition, while of immense importance, is secondary to two fundamental truths, love and understanding, without which everything else is meaningless.



Ms. Irene Herrera (イレーネ・イレーラ)

“Japanese Culture: the changing of four seasons” Fundow Jerasakanon

If asked to describe the essence of Japanese culture Fundow Jerasakanon would respond in one word: “seasons.” Landing in Fukuoka in the summer, Fundow was immediately drawn into a celebratory world full of firework displays, cricket songs, and *kakigori*. The summer was also a time of uncertainty, not only because she was

的価値であっても、ふたつの根本原理、「愛と理解」に勝ることはないことを、そして「愛と理解」のないところでは、すべてが意味を失うことを理解するに至ったのです。

「日本文化と四季」 ファンダウ・ジェラサカノン

「日本文化」を一つの言葉で表すとしたら、それは何でしょうか。筆者はためらわず「四季」と答えるでしょう。初めての日本。「真夏」の福岡空港に到着したジェラサカノンさんは、たちまち、お祭り気分の世界に惹きこまれます。夜空を彩る打ち上げ花火、夜を通して鳴きかわす虫の声、そして鮮やかな色のカキ氷！一方でその夏は筆者にとって落ち着かない季節でもありました。それは新しい「ことば」、彼女にとっては二つ目の外国語である日本語を勉強し始めたばかりであり、慣れない外国での生活を始める日々でもあったからです。日中はまだまだ暑い頃から、街なかの広告塔やデパートの服飾品売り場では盛んに「秋」の到来を告げています。そんな中で筆者は連休を利用して京都へ向かうフェリーに飛び乗りました。紅葉し始めた木々の葉が水面にその姿を映す中にたたずむ金閣寺。畳の上になったひとつ置かれた茶碗に注がれるお湯の音。文化のいずれを問わず、「冬」は沈黙考の季節。筆者は改めて日本人の生活について考えてみました。日本人は、豊かな生活を求めるあまり、すっかり大切なもの、「心」を失くしてしまっているのではないのでしょうか。心配していたところへ近づいてきたお正月。短い間ながら、人々が仕事を離れ家族とともにゆっくりと過ごすお正月。そして、とうとう「春」が到来。待ちに待った桜の開花。町は華やかな色に彩られ、人々は思わず微笑みを交わす「春」。訪れた両親とともに旅行した東京で、道に迷ってうろうろする筆者たちに限りなく優しく接する人々。とても大都市の住民とは思えません。日本人は季節の移り変わりに敏感だと言われています。それぞれの季節で気温が異なり、それに見合った行事や生活習慣が守られているというだけでなく、その移ろいが繰り返される中に日本人は物ごとの始まりと終わりを見、人生を見てきたに違いありません。またこれからも見ていくことでしょう。

faced with another language—her third! —but also a new life in a (still) foreign country. The advertisers and clothing companies signaled the coming of fall even before the weather, and Fundow, taking advantage of a break from school, traveled to Kyoto where she marveled at temples and meditated over tea. Winter, throughout the world, is a time of reflection. In her new environment, Fundow pondered the lives of modern Japanese, wondering if the pursuit of wealth is really worth all of the spiritual emptiness and uncertainty. Thankfully, New Year's brought families together and allowed respite, if only brief, from the difficulties of daily life. And then, at last, came spring. The pink of the cherry-blossoms brought festivity and smiles on people's faces. With her parents she took a trip to Tokyo, which despite its enormous size is populated by kind-hearted people, ever willing to help a stranger who has lost her way. The Japanese, it is said, are keenly sensitive to the seasons, for not only does each season carry cultural associations, but the passing of the seasons signals the transience of life as well as new beginnings.

“The Value of A Human Being” David C. Moreton

Having read through his grandfather's diary that describes the experiences of an English POW forced into labor by the Japanese army, and recalling his own experiences of living in a Japan where capitalistic consumerism appears to reign supreme, David Moreton despairs for the loss of those qualities that form the essence of humanity. As his grandfather became an object of labor for his Japanese captors, David too became an “English practice board” when living in Japan. While this parallel presents a scenario in which human beings have become objectified by others, the author proposes that the creation of identity through the acquisition of material goods is just another venue of objectification, albeit imposed upon oneself. Hope, however, is found along the Shikoku Pilgrimage with the custom of *o-settai*, that is assistance in the form of nourishment or repose given selflessly by those who live along the route. Through relations of camaraderie with others on the same pilgrimage, and the receiving of aid

「人間の価値 祖父と私の体験から」

デイビッド・モートン

筆者は、第二次大戦中に旧日本軍の捕虜となり過酷な労働を強いられた祖父が書き残した日記を読むにつけ、また、自らのこれまでの日本滞在、すなわち、極端なまでの消費社会で過ごした日々を思い起こすにつけ、人間らしい心をすっかり喪失してしまったかに見える日本人の姿に深い失望と落胆を覚えます。筆者の祖父が人間の尊厳を奪われ旧日本軍から労働力としてのみ扱われたと同じように、筆者もまた、日本では、ひとりの人間としてではなく「英語の稽古台」としてしか扱われていないと感じたのです。「切れやすい」子どもたち。実子を虐待する親たち。なぜ学校で「いじめ」や「暴力」がこんなにも多発するのか。祖父と自分の、人間の価値が他者によって無理無体決められていく体験を説明しながら、筆者は次のように問いかけます。富の多寡でのみ人間の価値を判断することは、祖父と自分に向けられたやり方と全く同じではないのかと。しかし、筆者は四国八十八箇所の霊場を巡る遍路に希望を見出しました。すべての巡礼が土地の人々から「お接待」を受けるとき、だれもが感じるのはあたたかい人間の心です。それが形のあるものの場合も、またそうでない場合も、一様にありがたいものであり、分けへだてのない無私の心が通い合う安息なのです。筆者はこうして互いに心を通わせる巡礼たちに、そして見返りを期待することなく手を差し伸べ続ける人々に真の人間の価値を見出しています。

KICAセミナー

このセミナーでは京都府の後援を得て、京都在住の外国人研究者やアーティストをお招きして専門分野のお話や日本への関心をお聞きしています。今年は3回続けて日本語教育関係の研究者をお招きすることができました。

第1回は11月5日(土)午後、「海外における日本語教育:パフォーマンスを通じた学習」と題してプリヤ・アナタさんに来ていただきました。アナタさんはインドのご出身で、オハイオ州立大学東アジア言語・文学部博士課程に在籍、2005年9月から国際交流基金招

from those who ask nothing in return, David has learned the value of a human being.

KICA Seminar

We invite visiting scholars and artists from abroad to talk about their specialized fields and their interests and concerns for Kyoto as well, at this seminar series with a generous support by the Kyoto Prefectural Government.

This past year, we were privileged to invite four specialists in Japanese Language in a row to talk on Japanese Studies and Teaching Japanese as a Second Language in their homelands.

Teaching Japanese as a Second Language through Performance

On Saturday, November 5th, we invited Ms. Priya Ananth, a doctoral candidate at the Department of East Asian Languages and Literatures, the Ohio State University, originally from India. She came to Japan in 2004 as a Japan Foundation Fellow to develop her research at the Kyoto University.

At the Seminar, Ms. Ananth introduced the teaching method used at the Ohio State University, and pointed out that the final goal of learning Japanese as a second language is not to write its grammar-book, but is to master vocabularies and behaviors proper for Time, Place, Role, Script and Audience, with which one can perform the best



Ms. Priya Ananth Conducting a Model Session

聘フェローとして来日、京都大学大学院で研究活動をしておられる方です。

普通、他者に謝罪するときの英語 “I am sorry.” は日本語の「すみません」ですが、お悔やみの際の “I am sorry.” は「すみません」に置き換えることはできません。外国語として日本語を学んでいる人の目的が、日本語の文法を上手に説明することではなく「ことばと仕草」を使って日本人に誤解されないように、また違和感を与えないように行動することであるならば、その教授法も自ずから想定された場面の中で実際に行動しながら覚えさせる「パフォーマンスを通じた学習法」になることをオハイオ州立大学での実践を基に説明されました。その後、5人の生徒役の留学生と一緒に楽しい模擬授業を展開されたアナンタさんは参加者の質問にも誠実に答えてくださいました。

第2回目は11月26日(土)、陳明姿先生に「台湾における日本語教育の実情」と題してお話いただきました。先生は『源氏物語』を中心に日中/日台比較文化・比較文学を研究し、東北大学大学院で博士号を取得しておられます。現在は国立台湾大学教授として研究と教育に携わる傍ら、台湾における日本語教育の現状を全国レベルで調査するなど、広く活躍され、台湾と日本との交流にも力を注いでおられます。この秋は京都大学大学院で研究をされると同時に古都の秋を堪能されたそうです。

台湾においては日本語教育が年々盛んになり、150の



Prof. Chen (陳明姿) Talking about Today's TJSL in Taiwan

imaginable without being misunderstood by the Japanese audience. Emphasizing that this goal can only be achieved by learning with this method, Ms. Ananth conducted a model session with five foreign students who played the roles of the beginning learners of Japanese language.

Teaching Japanese in Taiwan

On November 26th, we invited Professor Mungtzu Chen, from the Taiwan National University who was currently staying at Kyoto University as a visiting scholar. She talked about today's TJSL in Taiwan. Statistics Professor Chen gave us shows that more Taiwanese people are interested in studying Japanese and actually over 150 colleges and universities and over 300 high-schools have either faculties or courses of Japanese language, and more people are studying Japanese through broadcasting classes than before. She says that the estimation for Japan and Japanese language in Taiwan as well as the relationship between Taiwan and Japan were not always stable in the history, but it is true that Taiwanese has kept quite a large vocabulary derived from Japanese and more words from animation films or TV dramas popular among young people there are being added to it. She also points out that to use the vocabulary derived from Japanese is taken in Taiwan as something smart and trendy. Everybody present at this seminar fully enjoyed Professor Cheng's talk and chatting with her after it.

Today's India through Japanese Studies and TJFL

On Saturday, December 10th, Professor Rajiv Ranjan from the Department of East Asian Studies, University of Delhi gave a talk on Today's India through his fields. He stayed in Kyoto (1985-87) as a Monbusho Student for Japanese Language in Kyoto University, and in Tokyo (1998-99) as a Japan Foundation Research Fellow at Tokyo University. This time he was invited to visit Tokyo by the Japanese Government to discuss the outlook for the South Asian students coming to Japan to study. It was very kind of him to have spared his precious time in Kyoto for this seminar while he had numerous friends and acquaintances

大学、300以上の高校で日本語学科・日本語コースが設置されているほか、社会人向けの日本語塾や放送を通しての教育も人気が高いとのこと。長い歴史の中で、日台の関係も台湾における日本や日本語に対する評価も様々に変遷を繰り返しましたが、台湾語の語彙には日本語に由来するものが非常に多く、日本政府の支配時代に根付いた「父ちゃん・母ちゃん」などの家族関係語や「弁当、御餅、味噌汁」などの食事関連語などに加えて、昨今人気のアニメやTVドラマなどのもたらした影響も大きいとのことでした。台湾では、台湾語の中で日本語の語彙を使うことは「しゃれた感じ」と受け取られていると伺い、日本語における外来語の位置についても考えさせられました。先生のあたたかいお人柄に参加者は会場を去りがたく、和やかな交流が続きました。

シリーズ3回目、12月10日(土)にはラジブ・ランジャン先生をお迎えしました。先生は約20年前、国費留学生として京都大学に学ばれ、18年前からはデリー大学助教授として優れた後進を育てておられます。今回は外務省の招きで西アジアからの留学生数増強に関する会議に参加された帰途、懐かしい京都を訪ねての大切な時間の中をお話いただきました。

「インドは今、日本研究・日本語教育を中心に」と題して先生が語られた昨今のインドは、著しい経済発展に伴って、日本をはじめ中国、韓国などアジアの国々との交流を盛んに進めている活気に満ちた国の姿でした。日本語教育に関心を示す人の数はここ数年で飛躍的に増え、日本語を習得した人々はその能力に応じて、自動車産業やIT関連の日本企業で翻訳や通訳として、また観光ガイドやホテルの受付として様々な職場で働いているそうです。そのため、大学でも学習の枠を広げ、日本大使館、日本人会、民間の塾なども教室を新設しているものの、しっかりと教えることのできる教師の少ないことが問題になっているとのことでした。そのインドにおける日本の印象はというと、就職の機会という一面的な理解に留まり、日本人や日本の文化については未だほとんど知られていないというのが実情のようでした。ランジャン先生をはじめ、先生に続いて日本を理解して下さる方々との交流を今後も一層深めたいと強く感じました。

to renew his friendship with.

With its remarkable development in economy, India has been vitally communicating with Asian countries like China, Korea and Japan. Consequently, colleges and universities, Japanese Embassy, Japanese communities and private institutes are forced to provide more opportunities for the Indian citizens to learn Japanese. On finishing certain education in Japanese, Indian people work either at Japanese car industries, IT related companies, or in the field of tourism. It is a little regrettable to learn that most of the Indian people studying Japanese are not as much interested in Japanese people or its culture as we imagine, but tend to relate their studies simply with their job chances. Professor Ranjan has trained quite a number of excellent students in the fields of Japanese Language, Japanese History or Japanese Society in the past eighteen years at Delhi University and some of them have already started their teaching careers, but India today seems to need more and more well-trained teachers of Japanese language and its culture.

A Report from Kamchatka

On Saturday, March 4th, 2006, Ms. Natalia Kalouguina, librarian at the Science Library in Krasheninnikov, Kamchatka came and talked about the learners of the Japanese language there. It was very interesting to know that her city was already known as a popular mountain resort for ski and fishing among the Europeans. Showing beautiful photos of the town and the surroundings, Ms.



Ms. Natalia Kalouguina Talking about Kamchatka

千玄室交流プログラム

京都で学ぶ留学生とその家族のために、千玄室理事長の支援を得て、伝統芸能の鑑賞や、料理を通じた交流、日本語学習の支援などを行っています。

留学生と作る世界の家庭料理

2005年は「日本におけるドイツ年」で、様々な交流イベントが両国で行われました。ヴァレリー・ダルドルップさんとシュサンネ・レルピンガーさんは3年前に同志社大学チュービンゲンセンターに留学後、帰国しておられましたが、この機会に大好きな日本の人々にドイツ料理を紹介したいと再来日、全国を回って交流を深めておられました。ご縁があって6月6日にお二人をお招きし、スープ、鶏肉料理パスタ添え、チーズケーキなど伝統の料理を教えてくださいました。

粉を捏ねてしばらく寝かし、独特の搾り出し器に入れて押し出すパスタは形も色も味もあたたかです。民族衣装にお色直しのヴァレリーさんたちを中心に、現在ドイツから留学中の学生たちも加わって、皆で賑やかに食卓を囲みました。



Ms. Lerbinger and Daldrup Introducing German Cuisine

11月14日の講師は林佳蓉さん。京都大学に留学中のご主人と来日中ですが、ふるさと台湾では高校の家庭科の先生です。てきぱきと日本語で手順を説明して指導してくださったのは「焼売」。たまねぎは使わないこと、むきえび、もち米、卵白を加えること。卵黄は蒸してトッピングに。手作りの皮は強力粉でと、私たち「生徒」は楽しく林先生の授業を受けました。もう一品は粟粥。KICAスタッフが西安旅行から持ち帰った干し粟を加えて炊いたお粥に、たっぷりの砂糖と林さん心尽くしの竜

Kalouguina invited the audience to visit her city as tourists as well as teachers of the Japanese language. She also appealed the audience to donate books written in Japanese so that more students be able to learn Japan and its language. She was scheduled to go home in two weeks after finishing the trainee-ship at the Japan Foundation Kansai Center.

Genshitsu Sen Program for Foreign Students and their Families

KICA's programs for foreign students and their families such as Private/Small Group Lessons in Japanese, Theatergoing for Kabuki, Kyogen and Noh, and Cooking with Foreign Students has been supported both spiritually and financially by Dr. Genshitsu Sen.

The Joys of Cooking with Students from Abroad

Among many cultural events which took place in Germany and Japan as well to commemorate the 2005-German-Year in Japan, we invited Ms. Susanne Lerbinger and Valerie Daldrup to introduce their favorite dishes on June 6th. They had studied Japanese for a year at the Tubingen Center for Japanese Studies at Doshisha in 2003, and this time, they volunteered to tour around Japan with their cooking pans in their hands, just out of their love for Japan. Savory chicken soup, old-fashioned pasta and simple but delicious cheese cake were prepared with traditional formula and utensils and fully enjoyed by German and Japanese participants.

On November 14th, Ms. Ling Janglong, teacher of Home Economics at a high-school back in Taipei showed how to fix world famous shaomai, Chinese steam meat dumpling, and sweet rice porridge. She was on her three-year maternity leave and was accompanying her engineer husband studying at Kyoto University then. We all enjoyed her clear and prompt way of teaching. She called our attention to add shrimp, glutinous rice and egg-white, but never onions to her shaomai, which turned out to be one of the best we ever had. As one of KICA's staffs had brought dried ju-jube from Xi'an in summer, Ms. Ling

眼肉を混ぜ合わせると出来上がり。甘いお粥を恐る恐る口にすると、「まあ、なんと美味しいお粥でしょう！」今回もモンゴル、ドイツ、中国、スペイン、ヴェネズエラからの留学生も加わっておしゃべりも楽しみました。

会場は2回とも同志社同窓会館の調理室をお借りしました。

KICA日本語個人・小グループレッスン

昨夏は台湾の植物分類学者、Pさんとプライベートレッスンをしました。Pさんの日本滞在は約3ヶ月でしたが、実際にレッスンをしたのは2ヶ月足らず。Pさんも私もいろいろ予定がある中で、毎回、次回の日程を決め、週に1～3回と非常にフレキシブルでした。Pさんは独学で日本語を勉強しておられたので、しばらく習得状況を見たうえで、初歩から文法事項をおさえながら会話にもっていく形で進めました。

Pさんをご専門から植物、特に花に詳しい方でした。私も花好きなので、花の話題になると、いつも1時間半のレッスンが2時間を超えることもありました。毎日の生活の中で、花に関する面白い物や話題を見つけて来られるので、毎回、小さな驚きを楽しみました。

秋の七草模様のコーヒーカップセット、五条通りの陶器市からは楓の種の形をした珍しい観葉植物、緑の地に赤紫の縞模様です。そして本棚の花瓶には大学への道中で摘まれた草花などなど。

私もPさんのご興味がありそうなものを持参しました。白山登山をしてきた時は、撮ってきた高山植物の写真をお見せしながらのレッスン。台湾が高山植物の宝庫であることを知りました。台湾固有種の高山植物の絵はがきをいただき、黄色い竜胆に目を眩りました。

植物画の展覧会には、ご一緒できませんでしたが、私も観にいきました。見た後の感想が同じだったので、話が弾みました。同好の士としてお互いの知識や情報のやりとり、確認、学習、体験と、生きたレッスンが出来ました。Pさんの最後の言葉“Keep in touch.”が心に残っています。(廣瀬和子)



Ms. Ling (林佳蓉) Teaching Taiwan Cuisine

decided to use them in her menu. She surprised us by adding a lot of sugar and sweet litchi fruits to the hot pot of rice porridge with dried ju-jube. Since we do not have a habit of making porridge sweet, nobody did not want to taste her porridge at first, but students from Mongolia, Germany, China, Spain and Venezuela started to join us and found the porridge great. Yes, we were all ignorant! It was just delicious!

KICA Private/Small Group Lesson in Japanese

We have tailored the needs of students of the Japanese language since we started this program in 1995. Following is a short report on one of her lessons by Ms. Kazuko Hirose.

My student last summer was Mr. P, a botanist from Taiwan whose stay in Kyoto was as short as three months. As he was too busy with the research in his specialized field to decide his lesson dates ahead of time, we always fixed the next date when we finished one. We met two to three times a week this way. Because he had studied Japanese by himself, I found it necessary to confirm grammatical usages before starting conversation drills each time.

As a great flower-lover myself, I fully enjoyed talking with Mr. P who knew so much about flowers. He was not only knowledgeable about flowers, but also quick in finding interesting topics and objects with flowers such as a set of coffee cups with seven-autumnal plants painted on them, a pot of rare foliage plant in the shape of maple

国際茶会 「^{いちざ}一座建立」のころを知る

10月15日（土）裏千家茶道会館で国際茶会（京都国際文化協会・国際茶道文化協会共催）が催されました。畑肇京都国際文化協会理事の挨拶で始まり、招待客350余名が茶道に親しましました。

事前の申込時間に従いお客さまは受付を済ませて、2階の待合で茶道の解説ビデオを鑑賞した後、係りの案内で1階の茶室に入ります。室内はやわらかい光に満ち、床の間には掛け軸、香合、茶花が飾られています。露地庭のみどりも鮮やかです。世界各国から来洛して裏千家茶道を学ぶ「みどり会」留学生による手前が始まると、同じく「みどり会」の学生によって菓子、続いて薄茶が運ばれてきました。まずお運びの方に、次に客同士で、最後に亭主に軽く挨拶をして、菓子と薄茶をいただきます。稽古を重ね、見事な所作でもてなす「みどり会」の学生たちに、来日間もない留学生たちは見様見真似で応えます。両者の間には和やかで心地よい緊張が通い合います。茶席の後、希望者は茶道センター資料館で茶道具や歴代宗匠の書などを鑑賞しました。

茶会当日は時おり雨が激しく降る中、KICAの友人たちが交代で屋外の受付を手伝ってくれました。彼らと心を合せてお客さまを迎えられたことは、茶会が盛会であったことに加え、大変嬉しいことでした。

国際交流講座

日本語を教える人のために 日本語教師養成講座

当協会の日本語教師養成講座は1983年に発足しました。当時は、日本で生活する外国人が徐々に増え、また海外で生活する日本人が増加してきた時期にあたります。私たちの周りにも外国人が増え、「日本語を学びたい」という声を聞くようになりました。しかし、いざ私たちが日本語を「教える」となると、日本語の基礎的な問題点にぶつかりました。「日本語教師養成講座」は日本語を一つの言語として原点から学ぶ必要性から開かれました。

発足から22年の間に、日本語学習者や日本語教育の環境は大きく変化しました。相次いで国際交流団体が設立され、海外での日本人の活動は以前では考えられ

seeds, and so on.

It was when I showed him a photo of some alpine plants from Mt. Hakusan that I came to know that Taiwan is a treasure house of alpine plants. I never got tired of the lessons since we never talked about imaginary topics but about specific matters, knowledge and information about flowers and plants. I believe it was also true with him since he left Kyoto with “Keep in touch” at the end of the summer. (Kazuko Hirose)

International Tea Gathering

The International Tea Gathering, co-sponsored by KICA, Urasenke Foundation, UIA and the Tanko-kai, at the Chado Kaikan of Urasenke on Saturday, October 15th. KICA Trustee, Hajime HATA, Professor of Doshisha University, gave an opening speech, and Midorikai (Urasenke International Students of Tea) members greeted some 350 guests.

Each of the guests arrived at the reception desk at the time appointed and were led into a tearoom. They found a hanging scroll, an incense case, and modest flower arrangement on the feebly lit Tokonoma making a subtle contrast with the mossy garden outside of the room. A Midorikai student started *temae* (the making of tea) while



International Tea Gathering

ないほど多岐にわたり活発に行われるようになってい
ます。それに伴い、日本語教師やボランティアなど多
くの人材が求められるようになりました。

当講座は、「日本語の特質」、「対照教育と教授法」、
「確かめと深め」の3部に分かれ、1年間を通じ行われ
ています。毎週火曜日、午後6時半から8時半まで、40
回行われ、毎年50名内外の方が受講されています。修
了された方には、京都市国際交流会館で開かれている
「やさしい日本語」教室での見学と実習があります。当
講座の修了生の中には、日本各地で、また海外で活躍
する人も出ています。

受講される方は日本語として教養を深めたい、日本
語教師に必要な知識や技術を習得したいなど動機は
様々ですが、「日本語」を通じて世界中の人々と多文化
共生が実現されることを願い、私たちは努力を続けて
いきたいと思っています。

日本語を学ぶ人のために 「やさしい日本語」教室

外国語としての日本語を学ぶ「やさしい日本語」教
室が今年も京都市国際交流会館でスタートしました。
受講生は日本語に初めて出会うか、出会って日の浅い
方々です。国籍や母語、それに来日目的もさまざま、
共通項は日本語を勉強してみようという意欲です。

私が担当しているのは初めて学ぶ方のための「入門
クラス」です。受講生の国籍はオランダ、カナダ、韓
国、イギリスです。絵や写真の他、本や雑誌、手持ち
の文房具など教室にあるものはなんでも使い、ジェス
チャーも大いに活用し、ときには受講生にも体まで動
かしてもらっての体当たりの授業です。今のところ皆
さん熱心で、受け答えもスムーズ、わかったという合
図の目の輝きにやりがいを感じます。全12回のレッス
ン終了時には確かな何かを身につけ次のステップに進
んでほしいと願う毎日です。(辻加代子)

やさしい日本語 (A) 毎週金曜日 13:00-15:00
(B) 同 18:30-20:30

やさしい日本語 毎週木曜日 18:30-20:30

場所: 京都市国際交流会館、費用: 3,000円(12回)

問合せ先: KICH (075-752-3511)

または当協会(075-751-8958)まで。

other students brought in a sweet and a bowl of tea for the
guests. As they had arrived in Kyoto only a couple of
weeks before, some guest students simply admired the
master *temae* and *hakobi* by the Midorikai members. Both
groups learned “an exquisite, singular moment in time
shared by the guests”. After tea, the guests also enjoyed a
seasonal exhibition at the Urasenke Chado Museum.

We all went home with a lovely *o-miyage*, a box of dain-
ty sweets in our hands and peacefulness in our hearts. The
gathering was only possible with kind cooperation of all the
friends of KICA’s including the oversea students from Kyoto
University and Doshisha University who volunteered to help
the staff members at the reception desk in the heavy rain.

Japanese Classes for Beginning Learners at KICH

KICH and KICA jointly provide classes in the
Japanese language for the newcomers who want to study
Japanese for the first time. They largely differ in their
nationalities, mother-tongues, or in their goals, but they
are invariably eager to learn.

I am teaching the introductory class with students
from Holland, Canada, Korea and England in it. Since we
do not have any common languages, I need to utilize any-
thing I could including pictures, photos, books and maga-
zines, stationeries in hand for their understanding. I some-
how manage to make my intentions understood with my
exaggerated gestures so far. Teaching them has been very
challenging, and rewarding when they brighten their eyes
with joy as they grasp what is being taught. I am simply
hoping that all of them will continue their study after fin-
ishing this class. (Kayoko Tsuji)

Each course starts in April, July, October and January

Place: Kyoto City International Community House

The First Step in Japanese (A) 13:00--15:00 on Friday

(B) 18:30--20:30 on Friday

The Second Step in Japanese 18:30--20:30 on Thursday

Fees: ¥3,000/ course

Information: Call KICH at 075-752-3511

or KICA at 075-751-8958

揺れ動く私の日本観



ソニア・エネヴァ

私の生まれ育った国は15年前まで共産主義の国だったので、子どもの頃には、「味方」のソ連と東ヨーロッパの国々、そして「敵」の西ドイツ以外の世界は殆ど知られていなかった。しかし、私には日本が存在していた。私の日本は、父が出張へ行って買って来てくれた子供用の、ミッキーマウスの模様がついたピンク色のキッチンセットだった。長年にわたり、その国はどこにあるか、どんな国かを全く気にせず、キッチンセットがある限り、日本は私の目の前にあった。

民主主義の時代になり、バナナ、光沢紙の雑誌などの形で世界がお店に入ってくるに連れて、テレビを通じて人々の家にも新しい世界が広がり始めたその頃、私は日本についての番組に釘付けになっている自分に気づいた。日本は最早キッチンセットだけでなく、むしろ魅惑的なまったく別世界だった。侍・最新技術のような正反対の面をあわせ持つ、夢にも見てなかったこの新しい世界に少しずつ夢中にさせられ、結局高校を卒業してから、日本学科に入ることにした。急に、今までと全然違う面から日本を見るようになった。文字！大学の最初の日に平仮名を教えてもらい、次の日にテストがあると言われた瞬間、生まれて初めて日本に対して不安を感じた。一晩でこの新しい日本を身につけることができるのかな？！頑張れ！「あ - お」「め - む」「ね - れ」それぞれのペアがまったく同じように見えたにもかかわらず、視覚、聴覚、触覚を合わせて覚えきれた。漢字はさらに挑戦だったが、同時によりうっとりさせられた。その後二年半、日本語、日本文学・歴史・経済・芸術に付き合い、知識がだんだん広がっていったけれども、昔のキッチンセットを別とすれば、日本は実体のない二次元の映像に過ぎなかった。その時、初めて実際に日本に来ることになった。比較することのないぐらい嬉しい私はやっと本当の日本を、最初は鳥瞰だったが、見られた。六週間の間、

出来る限り多くのことを知りたくて、ドキュメンタリーで見たことは事実に合わせているかどうかを判断したくてたまらなかった。さすがに、日本には最も優れたドキュメンタリーでさえ表現できない特性があることをまもなくはっきり理解できた。自分の宗教とまったく違う寺社に入る時の興奮；使い方の分からない珍しい機械に至る所でぶつかる時の軽い困惑；大阪・東京の大都会の雄大さを感じる喜び；広島原爆博物館で知った戦争の、体全体が無声の悲鳴をあげるかのようなその恐怖；ホストファミリーの暖かさに対する感謝の気持ち 全てが心に響いて、帰国しても日本の恋しい味がいつまでも残っていた。

二度目の日本は日本語日本文化研修生の目から見ることになったので、今度は一年間日本をたっぷり経験する機会が与えられ、五感を「開けて」飛行機を降りた。再び、何を見ても、それは日本の無条件の善だけを示していた。この前に恋に落ちた京都は相変わらず素晴らしいし、どこにも微笑して親切な人がいる。小さなことまで周りを観察しながら、徐々に若者のファッションに目を奪われてきた。色が決して合わないブラウスとスカートや、ピカピカしている装飾物、何枚もの上着を重ねたり、派手な靴、鞆、アクセサリを身につけたりする人が最初は変に見えたが、だんだん好きになっていく私があった。特に、ヨーロッパの男子と違って、日本人はおかまと思われる心配もせず、ピンクなど新鮮な色を着たり、ヘアピンを付けたりするところを見て、本当に感心した。程なく私もファッションの試みをし始めた。気づいたら、日本はもう見るだけの的ではなく、私を変える手段になっていた。

服のファッションを容認した後、流行っている音楽に目を向けた。そこにあったのだ。私の日本のイメージをひっくり返すCDが。私は別に何の目的もなく「Tower Records」に入った。今から思えば遠く感じる

その冬の日に、偶然にオレンジレンジの新しいアルバムを試し聴きました。へえ、何それ～？笑いながら思った。聞いたこともなかったこの歌手がまるでCDを売るためだけでなく、楽しみのためにアルバムを作ったかのように聞こえた。早速それを買って、家でゆっくり聴いて以来それから離れられなくなった。他の音楽を全てやめ、オレンジレンジの新大ファンとして彼らについてもっと調べてから、まもなくデビューアルバムも手に入れ、さらに好きになり四六時中オレンジレンジを聴くようになった。けれども、生まれて初めてアイドルを見つけた私は自分の青春期のような情熱に驚きっぱなしであったことを包み隠そうともしない。とにかく、オレンジレンジが全国ツアーを始めると聞いたとたん、ぜひともライブへ行こうと強く決意した。しかし、チケットの発売日の二週間ぐらい前、わずかな心配が心に浮かび始めた。というのは、その時オレンジレンジは大人気バンドになっていたため、ライブに対するファンの関心が拡大するに連れて、夜中3時にテレビ番組でチケットを予約したり、一時的な予約電話番号が内緒で回ったりすることが起こった。こういう電話番号を手に入れても、決して繋がれないので、私の落胆も比例して膨らんでいった。しかしまだ発売日を、希望を込めて待っていた。いよいよ一月二十三日の朝が来て、七時ごろにチケットぴあの前に着いた。発売は十時からだと知っていたので、その場に女子二人しかいないことはそんなに珍しく思わなかった。ひょっとしたらそれは京都の冬の最も寒い朝だろう、と不快に意識して、自動販売機で買った熱いドリンクを何本も飲みながら、開店を待ちに待っていた。ようやく店員が来たが、教えてくれたことから望みがないとわかった。またしても、直接に買えず、電話で予約してからチケットをもらうことになっていたそうだ。駄目だよ!! どうして? こんなに待ってたのに! なんでいつもいつも機械でことをやってるの? どんなにうめいてもどうしようもなかった。もちろん教えてもらった番号に絶えずかけてみたがなかなか繋がらず、結局三時間半後になってようやく繋がれた時、「ご予約を終了いたしました」という世界一ひどいメッセージだけを聞いた。その日の午後は今まで日本で過ごした時間の中で一番思い出したくないときだ。困惑した気持ちと、同時に

抑えられない怒りでいっぱいになり、私の大好きな日本に初めて幻滅感を感じずにはいられなかった。電車が一分遅刻する程度のまったくどうでも良い時の車掌の深いお詫びと正反対に、チケット一枚で夢を断られた、本当に迷惑をかけられた今の私には謝る人が一人もいなかったことは問題の一面に過ぎなかった。その日に限り、日本は私の愛に応えず、最も残酷な方法で私に違和感を与えた。その悔しさを乗り越えるには時間がかかった。春休みに沖縄へ行かなかつたら、多分私はずっと落ち込んでいただろう。しかし、沖縄の素晴らしさは日本に対する昔の好意を無条件に回復させた。京都の神秘的な狭い道や、東京の不思議なにぎやかさとはまったく違う世界だった。わくわくさせる綺麗な海と空、見たことがなかった植物、どこを見てもリゾート気分を最高に高めてくれるハイビスカスの花、明るい、広い町とのんびりしている人々、全部そろって魔法のような印象を残した。たとえ、この地上の楽園にあるべきではない米軍基地や残酷な戦争の跡があっても、私にとって沖縄は終りのない休みのリズムで鼓動していた。(「南の島」を好きになったもう一つの理由は、そこがオレンジレンジの出身地だからである。)そして、無上の幸福の一週間が経ち、沖縄のハブ酒という恐ろしいお土産を買わずに京都に戻った時、オレンジレンジがどこからかインスピレーションを受けるのを見た今、ライブに行きたいという希望が再び現れた。キャンセルされたチケットを捜して、無数のチケットぴあ・金券ショップをむなしく廻ったあと、一つしかやることは残っていなかった。つまり、コンサートの日に会場に行って、ダフ屋から切符を買うことだった。その間に、インターネットでオレンジレンジの切符は正式な値段が4,200円であるにもかかわらず、四・五万円以上のとんでもない金額まで上がっていたので、コンサートの当日に、途方もないお金をつぶさないように一万円しかもって行かなかつた。着いたら、ホールの前にダフ屋が沢山いたが、みんな三万ぐらい求めてきた。結局、一人は私が持っているお金で切符をくれると約束したが、コンサートが始まるまで待たなければならなかった。仕方なく、激しい雨から逃れてマックに入って、コンサート場へ続々やってきた嬉しい顔つきを見つめながら、日本のもう一つの特徴を

考えた。どういうことかと言えば、私の国にはそれほど好まれている歌手はまずいないし、コンサートがあれば、切符はどこでも買える。多分、小さすぎて、本当のセレブリティとっていい人はいないのかもしれない。でも日本では、その6人の男の子以外にも、ファンの中に病的と言えるほどの興奮を生み出す芸能人が数多くいるのではないかと不思議に思ったけれど、同時に多少羨ましくも感じた。いずれにせよ、ライブの開始時間が近づいてきたとき、また「私の」ダフ屋を捜しにいった。もっと待てと。ふむ、いつまで？コンサートが始まって、人は全然来なくなっても、もっと待てと言われ続けた。マックに二百円ほど使ったので一万円弱になった私の全財産をもって、私はついに切符をくれるかどうか直接に聞きにいった。いくら頼んでも「一万持っていたらあげた」という、痛いほど冷たい返事しか来なかった。

その夜の帰り道に、涙のかけから日本を見た。ただしそれは愉快的な景色ではなかった。他の人に一万円で売ったのに、僅か二百円が足りないだけで、切符をくれなかったそのうぬぼれたダフ屋の顔は絶対消えることなく、私はとてもつらい思いをした。さすがに、どこにでも悪い人はいる。外人だからチケットを断られたのかもしれないと思ってしまった。嫌でも、今まであまり気にしていなかったことが次々に浮かんできた。知らぬ人からのとがめるような目つき、電車で隣の席に誰も座ってくれなかったこと...いくら「郷に入っては郷に従え」と頑張っても、愛しく思っている日本では「外人」とはいつまでも外の人としてしか認められ

ないのだとはっきり分かった。

ただ、次の朝新しい人生観を持って目を覚ました。つまり、日本となじむようになる必要などなかった。昔のキッチンセットを初めて手にした時以来私はずっと日本を好きだった。自分が好きな人の短所を批判する権利がないのと同様に、大好きな日本の短所を批判する権利もない。結局、絶対的な善でなくても、体験させてくれたことの大部分が素晴らしい思い出を残したので、日本は私にとって最高だった。

その事件の後、日本人の考え方をもっと理解するために、出来るだけ人の話を聞いたり、若者に会ったりするようにしていたが、今度はもうちょっと冷静に判断をすることにした。子どもの頃の日本についてのイメージが目の前で変わっていくに連れて、その無数の面で私自身も成長していくのを感じた。

最後に、オレンジレンジのコンサートへ行かなかった絶望と同じくらい強い感動を感じた良い思い出を分かち合いたい。それはもちろん、京都の最も壮麗な時期の祇園祭だ。山鉾巡行前の四日間毎日現場に行き、山鉾を見に来た人々を見た。浴衣・着物を着ている姿が今まで見た日本の中で間違いなく一番（実は相応しい言葉を見つけられなくて、英語のfabulousしか思い出せないが）素晴らしかった。凝った髪型のギャルでも、キティちゃんの模様の浴衣を着ている女の子でも、茶髪の少年でもみんながこの時代に属している人ではないかのように見えた...

この魔法こそは私が実際に見て感じた日本だ。

日本美術における時間と空間

絵巻と建築を中心として



朱 琳

今日、テレビやビデオ、映画などの映像メディアが圧倒的に流行している。そのため、「活字離れ」という現象を心配している人が増えているようである。しかし、逆に見れば、場合によっては、映像メディアは、感覚的かつ直接的に内容を捉えることができるため、文字よりもより有効な伝達手段であろう。

特に、今日、日本の漫画やアニメーションが世界的にもはやされているが、それは何も現代特有の現象とは限らないように思われる。12世紀に花開いた絵巻物にそのルーツが見られるであろう。映画監督高畑勲の言葉を借りて言えば、絵巻はまさに「十二世紀のアニメーション」である。日本人は昔から物語を絵とともに楽しみ、絵を通じて物語を理解することを好んだようである。テレビも映画もなかった時代に、物語絵巻を見ることは大きな楽しみであった。物語を巻物形式の絵画に表すことは世界各地で行われているが、それを一つの高度な芸術様式にまで高めたという点で日本の絵巻は美術史上、特異な地位を占めていると言えよう。とりわけ中世には素晴らしい名作が続出している。『源氏物語絵巻』『信貴山縁起絵巻』『伴大納言絵巻』『鳥獣人物戯画』のいわゆる四大絵巻は今でも人々に愛され、人気の高いものである。

絵巻物は文学・書・絵画の三者がうまく融合し、互いに補い合う総合的な芸術作品であると言えよう。と同時に、絵巻物も時代を映すとも言える重要な歴史資料であるから、様々な接近の方法を試みる必要が大いにあると思われる。その中、絵巻の時間と空間の表し方に注目し、日本人の趣向や美意識のあり方をさぐるのが有効なアプローチの一つだろうと思う。現在知られている絵巻が、物語という時間芸術を、絵画という空間芸術の形式を借りて表現するためのさまざまな工夫を提示してくれている。

1. 絵巻の形式に見る時間と空間

絵巻の形式そのものは、中国の画卷に由来するもの

であるが、12世紀の日本の絵巻はそれを本家の思いもよらない時間・空間の表現の手段として文字通り「展開」させた。中国では一度に全部を広げて全図を見るのが本質的な鑑賞法であるのに対して、日本では絵巻を少しずつ巻き広げつつ見るのが普通である。そのため、中国の画卷よりも日本の絵巻のほうが時間表現へのこだわりを強く感じられる。まさに奥平英雄が指摘しているように、「絵巻を見るには、右から左へと視線を移して見ること、俯瞰の姿勢で見ること、そして両手の間に繰り広げる画面は60前後が適当であること、この三つが前提条件といえる」。絵巻は床や見台に置き、肩幅ほど開き、上からかがみこんで見ながら、左から引き出しては右手で終わった部分を巻き取るということを繰り返し、物語を理解していくものである。

絵巻を右から左へと繰り広げていくのに従い、様々な場面が移り変わっていくことこそ、その鑑賞の面白さであろう。また、左手から現れ、右手の中にしまい込まれる画面、そしてその画面に込められた絵巻の時間表現はストーリー展開のための工夫であり、面白いところでもあるように思われる。右から左への方向性を示しつつ、すでに巻き取られた右側（見終わった画面）は過去、目の前の絵が現在、そしてこれから開かれる左手の中（まだ見えない画面）に未来がある。

したがって、ある意味で、絵巻は時間的経過のある物語を絵画化したものであり、時間芸術と空間芸術の融合したものであると言える。とりわけ、比較的長い画面に描き続けられた連続式構図の代表作『信貴山縁起』は人目を奪うのである。『信貴山縁起』の時間表現は、画面を右から左へ順番に展開することによって得られる自然な時間経過のほか、一つの建物の部屋を分けて、幾つかの場面を描いたり、一つの背景の中に同じ人物を繰り返し描くことによって物語を展開するといった手法である。そして、この『信貴山縁起』に用いられた時間表現は、極端な言い方をすれば、

絵巻の時間表現の可能性のすべてを出し尽くしたとさえ言えよう。もちろん、これ以降の絵巻が、すべて『信貴山縁起』を手本にして作られたというのではなく、それまでに用いられていた手法がそれぞれの絵巻の中に取り入れられたということになるのであるが、『信貴山縁起』はそれを最大限に利用し、緩急自在な物語の展開を実現したと言える。

要するに、日本の絵巻は時間・空間の表現手段として独特なスタイルを確立し、その後も脈々と受け継がれてきた。例えば、初期風俗画、黄表紙本、絵本、浮世絵、紙芝居、マンガ、アニメーションなどがそれである。

2、絵巻の画面に見る時間と空間

『源氏物語絵巻』を見る時、垣間見場面が頻出することに気が付いた。「垣間見」という言葉は、すでに「物語のいではじめの親なる竹取物語」に記されている。垣間見は本来隙間から覗き見ることを意味していた。したがって、垣間見場面を絵画化する場合、必ず何か空間を仕切るものを置かなければならない。絵巻には、御簾や几帳、屏風、襖、障子などの調度が多く描かれているようである。これらの調度はただ単に身の回りの道具として描かれているのか、あるいは特定の意味を持って描かれているのであろうか。

絵巻物にも見られるように、日本の場合、内と外を明確に遮断するような建具をとりつけるのではなく、形ばかりに仕切り、内と外が対話できるような曖昧な空間をつくるのが普通である。これは重要な空間表現である。まさに「垣間見」という言葉が示しているように、物の透き間を通して、外から内部を覗き見することもできれば、内部から外を見ることが出来る。いわば「二重の垣間見」である。それは、古代の上流貴族の女性は親しくない男性に顔を見られてはならないというタブーにかかわっているとされる。例えば、『源氏物語』若菜上には、女三宮と柏木との二人の宿命的な出会いが描かれている。満開の桜の下での蹴鞠の場面を垣間見る主体であった女三宮の姿が、逆に唐猫の首に結ばれた紐により偶然に簾が引き上げられたため、柏木の目に晒され、見られる対象に転化してしまったことになる。その場合、簾を境界の装置として重要視すべ

きであろう。

また、『源氏物語絵巻』現存諸図の中でもっとも人目をひく華やかな美しさがあり、よく関連書物の表紙を飾る竹河第二図を見てみよう。絵画化した場面は、春の夕暮れ、玉鬘邸で、夕霧の息子蔵人少将が、廊の戸口から御簾越しに中庭を隔てて暮を打つ美しい姉妹を垣間見るものである。姉君の顔は御簾で隠し、妹君の方は後姿に描き、どちらもその美しい顔を鑑賞者に見せようとはしない。御簾という調度を通じて、姉妹の美しさを読み手の自由勝手な想像に任せようとしたのであろう。

そして、恋の歌を多く収めている『万葉集』の中に、「君待つと わが恋ひ居れば わが屋戸の 簾うごかし 秋の風吹く」(額田王)という歌がある。この歌は簾という道具により、恋の微妙な心情を生き生きと描き出している。時は秋、一人の女性がある男性の訪れを待っている。たぶん女性は朝からそのことに思いが向かうであろう。その思いの中で、周りの事柄に女の心は敏感に反応する。簾を軽やかに揺らしながら部屋の中に風が吹き込むことにも思いが湧いてくる。

簾や透垣などは、ある意味で、まるで一本の線のように内と外を分かち、装飾的な意味しかもたない境界の象徴性の高い記号に過ぎない。この「区切りながらつなげる」、「つなげながら区切る」空間の存在も日本文化の一つの特色であろう。

こういった特徴は内側の人物と外側の人物の様子を同時に描き出す絵巻の空間表現と直接かかわっているように思われる。それは、屋根や天井を取り除き、屋内を斜め上から俯瞰できる、いわば「吹抜屋台」の構図法である。それは、見せたい部分を見える部分として描き、複数の視線を可能にし、見る主体と見られる対象との共存の垣間見の構図を実現するので、より興味深いものが伝わってくる。

一方、絵巻の環境表現として、最も多く見られるものは四季表現である。これは重要な時間表現である。屏風などに山水や花鳥などの自然風景が描かれている。古代、貴族たちは、自然風景を屏風や障子、几帳などに描くことにより、観念の中で外界の大自然、いわば「小宇宙」を作りあげた。そのため、外に出かけず、目

の前の絵を見ながら、自然に一步近づき、四季の移り変わりを感じ取ることができるのである。室内にいながらにして外界の自然とつらなっているであろう。それは平安貴族の住宅様式 寝殿造の成立とかかわるばかりでなく、当時の日本人の趣向をも表しているように思われる。この点は、絵巻物に描いてある住宅の室内装飾を見ればすぐわかると思う。日本人は古くから自然に対して強い愛着を抱き、自然に対する感受性が豊かで繊細なため、いつまでも自然を生かし、自然に溶け込むことに努めている。美しい自然に恵まれ、しかも四季折々に微妙に移り変わる風土との共存により培われてきた日本人の独自の自然観と美意識も、ここから読み取れるのではないであろうか。

要するに、四季感を描き込むということは、絵巻物にとっては本質的なものであり、環境表現であると同時に時間表現として最も効果的に画面に作用していると言える。

3、日本の建築に見る時間と空間

日本文化の独自性とは様々な異文明を時間の糸に従い、積層させる集積回路のような存在である、という見方がある。日本の建築もまた、こうした時間の糸によって構築されているのではないであろうか。

中世の寺院建築には、古代以来の伝統を受け継ぐ和様（興福寺北円堂が代表例）、鎌倉初頭の東大寺南大門の再建に際して用いられた大仏様（天竺様）及び禅宗の移入に伴う禅宗様（唐様）の三態があるとされる。その後、和様を基礎として大仏様と禅宗様を取り入れた折衷様が生み出された。鎌倉 - 室町時代の建築の重

要な一面に折衷という性格がある。金閣・銀閣のような楼閣建築はまさしくこの折衷の産物であり、時間を積層させたデザインであると言える。

金閣寺は寝殿造の上に和様、そして禅様式をのつけた構成になっている。具体的にいえば、初層は寝殿造風の「法水院」であり、二層は和様（内部の形式は和様であるが、持仏堂の軒廻りと細部には禅宗様を取り入れたようだという）の「潮音洞」である。三層は「究竟頂」と言い、元来は舍利を安置し、また阿弥陀仏を祀る仏堂であり、禅宗様の建築である。つまり、和様の上に禅宗様を積み上げ、住宅の上に寺院建築をのせた構成である。

銀閣寺は二層の楼閣である。初層は「心空殿」という住宅風であるが、二層は「潮音閣」という観音殿で禅宗様である。

これらはともに過去・現在・未来の時間の糸を、垂直の空間構造に置き換えた例であると言えよう。

総じていえば、絵巻や建築は日本美術における時間と空間の表現において、独自の展開を遂げ、独特な特徴をつくりあげたと思う。これこそ日本美の真髄であると思う。

参考文献

- 『日本絵巻物大成』中央公論社、1977～79年
- 『世界に伝える日本文化の特質』『芸術新潮』（創刊500号記念大特集）、1991年
- 並木誠士・森理恵編『日本美術史』昭和堂、1998年
- 若杉準治編『絵巻物の鑑賞基礎知識』至文堂、1995年

日本への憧れと夢



楊悦

子供のときから日本に憧れていました。そのきっかけは一枚のはがきでした。

私が7歳の時です。学校から帰ってきて、父のテーブルにおいてある一枚のはがきに気づきました。なんてきれいなはがきでしょうか。雪に覆われている富士山を背景にして、桜はピンクの雲のように燃えています。風で散った花びらが桜の木の下で優雅に微笑んでいる着物姿の女性の肩に落ちました。その姿は、まるで恋人の帰りを待っているかのようでした。このはがきを見た小さな私はしばらく呆然とその場に立ち尽くしてしまいました。私の全身全霊がその一枚のはがきに魅了されていることがわかりました。そのときから富士山、桜そして着物というイメージの日本が私の脳裏に焼き付けられました。大人になったら、このはがきの中の世界に行こうと、その時、小さな私は決心したのでした。

日本に来たのは四年半前の秋でした。高く遠くシルクのようなブルーの空には雲が少しもありませんでした。「本当に日本に来たんだ。」と感動して涙が出てきたのを今でも覚えています。歳月が経っても、子供の時の日本に対する憧れとそのときの決心は少しも色あせることはありませんでした。ただ、そのときの私は日本に対する憧れだけを持っていたのではありませんでした。それは、日本留学が私の人生の転機になり、将来の夢に一步でも近づくためのチャンスにするのだという思いでした。そして夢は必ずかなえられると信じていました。私は、夢と希望に燃えている自分の心のなかで言いました。「深呼吸！出発だ！」。そして、静かに荷物を整理してから、慎重に歩き出しました。自分の新たな人生を歩き出すように。これが私の日本での最初の記憶です。

しかし、現実にははがきのようにきれいなものではありませんでした。着物は日本人にとっても珍しい存在

になっていました。日常生活のなかで、今の日本人は着物を着ません。きれいな女の人がたくさんいますが、皆、朝の通勤ラッシュで混雑している電車の中でゆっくり化粧をしています。桜が満開になったら、桜よりもたくさんの人間の頭が桜の木の下でうごめいています。花見でもないのに、日本の若者が道端のあちこちに座り込んで、騒いでいます。青春の贅沢です。富士山に登ったら、いたるところに捨てられたごみは富士山の治らない傷のように目だっています。

日本語ができない私は失敗ばかりの毎日を送っていました。学校で仲良くなった先生に対して、私は「あなたは時間ありますか。私の家に来て、餃子を作ってあげます」と。先生は苦笑いです。すると隣の韓国の先輩が「先生に対して、あなたとか、してあげるとか使わないです。敬語、敬語使うんですよ」と教えてくれました。「敬語ですね」私は、その時初めて敬語という言葉の存在に気づきました。そのような私ですからもちろん敬語を使うことができません。中国語には日本語みたいなシステムの敬語がありません。中国人はみんなストレートに自分の気持ちを表します。お土産を人に渡すときに日本人なら、「つまらないものですが」といいます。つまらないものなら、どうして人にあげるのですか。中国人は疑問に思います。中国人なら「あなたのために、わざわざ買って来たとてもいいものです。きっとあなたに喜んでもらえるはずですよ。」と主張するに違いありません。日本、日本語のこのような曖昧文化に対して、私はどうしたらいいのかわからなくなっていました。

また、中国では、食べ物は何でも火を通して食べるのが普通です。日本では、冷たいものや生で食べるものが多いです。「日本人はよくこんなものを食べて長生きをしているね」と不思議に思っていました。ある日、お昼のお弁当に初めてお寿司を買ってアルバイトに行

きました。やはり冷たい、とても食べられません。電子レンジに入れ、あたためてから、気持ちよくあつあつのお寿司を食べました。「あ、おいしかった。ご馳走様でした！」食べ終わってから、やっと周りの日本人の視線に気がきました。みんなまるで宇宙人を見たように目を丸くして、驚いていました。「ああ、しまった！またやっちゃったか。」私のこのような失敗は空の星のように数え切れません。日本語、日本人そして日本文化に戸惑っている私は、「はがきの日本はどこにあるんだ！ここにきた私は間違っているのか？だれか教えて！」と心の中で叫んでいました。

日本といえば、東京より京都です。京都に観光に行ったときの出来事です。我々外国人なら誰でも知っている、一目でも見てみたいと思っている京都のお寺といえば金閣寺です。その湖の中に建っている京都の金閣寺を見た瞬間、日本の中にもうこれ以上素敵な風景は存在しないだろうと、子供のとき見た富士山のはがき以上に感動させられました。隣で見ていた観光客の一人のおじさんが「金閣寺か。たいしたものじゃねえよ。本物じゃないし。もう一回燃えればいい。」とつぶやきました。「日本人よ、どうしたの。日本よ、これからどうするの」、大きなお世話！といわれるかもしれませんが、私は本当に心配していました。もしかしたら、日本人も不安なのではないのでしょうか。テレビを見れば、一番分かりやすいのではないのでしょうか。若者はいい学校に入るために受験の不安を抱え、大学に入ってから卒業後の就職の不安を抱えています。その他の人はどうでしょうか。仕事があっても、不景気のためリストラの不安を抱え、年金問題から老後の不安を抱えています。私から見ると日本社会はまるで不安ばかりの社会です。私はこのような社会に身を置いて、身近に日本人の不安を感じることで、自分自身も不安になってしまいました。

理想と現実は何でこんなにお互いが遠い存在なのでしょう。もう耐えられません。私は帰りたいです。中国へ。故郷へ。母のそばへ。やはり、私は中国人です。どうしても日本の社会に入ることができないと思います。こんなに無気力に感じたのは初めての経験でした。そのとき、私は一人の日本人に出会いました。私の一生の先生です。

「楊さん、なにか悩みでもありますか。」と聞かれました。私は神という存在はあまり信じていなかったのですが、そのとき、先生の頭の上に神のような光が見えました。

「先生、どうしてわかりますか」

「楊さんの顔と声ですよ。隠したくても隠せないものがあります。」まるで神様のように私の心を読んでしまったのです。私は一筋の希望の光をつかむかのように、先生に自分の気持ちを伝えました。先生は黙って私の話を最初から最後まで聞いてくれましたが、望んでいた慰めの言葉はありませんでした。先生は「帰りたいなら、簡単に帰ればいいです。なぜ、あなたはまだここにいますか」ととても冷たい口調で言いました。さっきまで神様のように見えていた先生は急に鬼に変わりました。私は答えることができませんでした。

しかし、このように先生に聞かれてから、自分について、日本の生活について落ち着いて考えることができるようになりました。そう言われてみると、確かに帰りたいなら帰ればいいのです。自分自身の悩みの理由は、自分にどうしてもあきらめられないものがあるからです。それは日本に来たときに抱いていた夢です。私の夢はたくさんあります。お金持ちになりたいです。きれいな女性になりたいです。子供をたくさん生みたい。このようにたくさんある中で、一番大きな夢は教員になることです。日本文化を学び、日本人を知り、そしてわたしが勉強したことを中国の子供たちに伝えたい。こんなにたくさんの夢を持って日本に来た私は、まだひとつも夢をかなえていません。このままでは中国に帰ることはできません。私はそのように決意をし、先生に報告に行きました。先生は「今日の楊さんの顔は生き生きしてとてもきれいです」と褒めてくれました。自分の夢のひとつ きれいな女性になることがなかったようです。一日でも。よかったです。自信が湧いてきました。

それから、毎月一回、先生の家で鼓のお稽古を始めました。

思っていたお稽古よりずっと厳しいです。言い換えれば、これこそ私がずっと求めていた理想的な日本像かもしれません。着物を着て、丁寧な日本語を使い、美しい振る舞いの中に含んでいる日本人の心が見えま

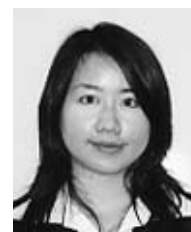
す。私は日本語も日本文化もよくわかりませんが、ただこの雰囲気の中で心を静めて、すべてを一生懸命に吸収しようと努力しました。鼓を構え、調べをし、先生の張扇子の拍子に合わせて進めます。周りのすべてを忘れて、自分と先生二人の世界になります。この世界で私と先生が会話をしています。鼓の音と張扇子の音で。掛け声と歌声で。風吹不動天辺月（風吹けども動ぜず、天辺の月）の心境はその一瞬のときだけがありました。先生は「稽古とは一より習い、十を知り、十よりかえるもとのその一。人間も同じ。」という言葉を教えてくださいました。いま考えれば、それは、私の日本文化との最初の出会だったのかもかもしれません。

そしてこのようなお稽古の中で、私は失敗しながらも確実に成長しています。日本社会への適応も少しずつできるようになりました。みんな、私の変化に気づいて、喜んでくれました。「楊さんって、日本人みたいになってきたね」。これは、恐らく、私をほめる言葉だと思いますが、あまりうれしいと思いません。いくら日本が大好きでも、いくら日本語が上手でも、私は日

本人になれません。今のままの私、外国人の私でいたいのです。しかし、外国人の私でも、日本社会の一員になりたいです。日本社会が本当の意味での国際社会になるのを期待しています。国は関係なく、同じ人間です。最近、中国と日本の間にはいろいろな問題があります。私ができることはただひたすら勉強して、早く自分の夢がかなえることができるように努力することです。そして、私が毎日必ずするお祈りがあります。「神様、仏様、仏像様、中国と日本の仲が良くなるように、地震や台風が来ないように、最後に、金閣寺がもう二度と火事にならないように。心からお祈りいたします。」

日本に来て本当に良かったと思います。いろいろなつらい思いがあったけれども、人生の経験になりました。楓葉経霜紅。（楓葉は霜を経て紅なり）いろいろなことを経験することによって、だんだん日本は私のイメージの中の日本に近づいてきました。7歳のときに見た、あのはがきの中にあった富士山、桜、着物のきれいな日本のように。

Japanese Culture; the changing of four seasons



Fundow Jerasakanon

If someone asks me to describe Japanese culture in one word, the word that appears in my mind will be “season”. Why “season”? The story began when the Thai airline touched the ground in August two years ago.

Standing in Fukuoka airport, there was a girl with the tired face grabbing huge bags and walking to the bus. It was my third time in Japan, but this time, it was totally different. I came here to study, not for travelling anymore. I would spend my almost-ending teenage life and early adult period in this foreign country at least four years.

At that time, it was summer. I was first time in a dormitory located on the top of a mountain. At night, I always opened the window and listened to the singing crickets. I was born in one of the busiest cities in the world called Bangkok. So it is really hard for me to hear the wonderful summer songs like this. At the beginning, it was the very romantic moment of my summer in Japan, but soon after that I noticed that summer was more than just the amazing cricket songs. I could also wear summer too. After two or three weeks passed, I bought my own red *yukata* with yellow *obi*, Japanese sandals and a small Japanese handbag for the summer festival. I went to *hanabi* for the very first time. The lovely voices saying “*irasshaimase*” and the thousands of times of bowing like you did something very special and valuable for them, were very charming. When you look around, you can see people got tans and sun-burns. It is easy to see that summer goes along well with the sea and beach. Then suddenly I heard the loud noise “*Boom! Boom! Boom!*”, the hundreds of colourful fireworks were incredibly stunning. Moreover, one hand holding a shaved-ice, another hand holding a small colourful *uchiwa* and watching *hanabi* while shaking our legs away from

mosquitoes were the perfect theme of summer in my opinion. And after all, you can feel at that time that you were really in summer.

That time was also my first time to learn Japanese language. I started to study hiragana, katakana, and kanji. A third language didn't seem to be easy for an 18-year-old girl like me anymore. Even though it was tough, there were a lot of funny parts in Japanese language such as some Japanese words adapted from English. I was really impressed with the words “*pasokon*” which came from personal computer and “*ma-ku-do-na-ru-do*” which was the pronunciation when Japanese call McDonald's – the world's largest fast-food restaurant. Those words are very cute!! Another interesting part of Japanese language is its own beauty. Maybe all Japanese know this haiku saying “*Furuikeya Kawazu tobikomu Mizuno oto*” by Matsuo Basho, which means the sound that a frog makes when it jumps into an old pond. If we translate this poem into English, it will lose its own gorgeousness. I think learning language is not only for communicating with people, because the Japanese language is an extremely essential tool to view Japan and Japanese culture.

I also read various types of books from manga to philosophy. On the shelf in my apartment, there are more than 30 Japanese books. “*Colourful*” by Eto Mori is my favourite one. From this book, you can learn Japanese culture and society from the eyes of an unsuccessful Japanese boy that later on, learns that everything has an angel and devil sides, and sometimes things don't go like what they seem. This book helped me pass through the hardest moment of adapting myself to Japan and returning to who I am.

I enjoyed the feeling of summer atmosphere until few

months passed – the thing I almost forgot but nature has never been forgotten – which was the changing of the new season.

I realized that the new season had come, not because I noticed that the weather was getting a little bit colder, but because I saw tons of new commercial advertisements on TV. When the season changed, there were great deals of new products limited for the new season. The soft puffy cake with *kuri* or Japanese chestnut with icing-topped looked so attractive to me. Moreover, my much-loved fish like salmon tasted extraordinarily nice in this season, too.

At that moment, owing to the short break of my University, I jumped on the ferry travelling to Kyoto – the capital city in the past Japan. After my feet touched the ground in Osaka, I looked around and saw that the people's clothes were already changed. From the pretty colourful dresses in the summer to the plain darker clothes that match with the red and yellow tones of the trees that covered all over the city. I stayed with my Japanese friend in Kyoto and she acted as a tour guide showing me around the city.

The sunset colour of leaves scattered on the grey stone ground leading me to one of the most famous sightseeing places in Kyoto called Kinkakuji. I bought a ticket and walked through the small street inside the fence. I was laughing and taking the pictures with my friends as I was walking along, when suddenly I was stunned. I saw the gorgeous gold building surrounded with the red, yellow, orange and brown trees serenely reflecting on the large beautiful mirror-liked lake. It was just like Heaven. I could not stop looking so that I almost forgot to take my memory into the film. There were countless places that I visited with my Japanese friend in Kyoto, all of them were very unique and amazing. In the evening, I participated in the traditional tea ceremony. There was no sound, only silence except for the noise from the tea pouring and the moving toward the *tatami*. The peaceful and calm feelings came over my mind. I watched the steam rising from the tea pot. My heart beat slowly. I took a deep leisurely breath and then my little brain started to work. I thought

Kyoto was telling me the incredibly important part of Japan – which was the root of Japanese tree. The memories of Japanese history came through both my eyes via the journey to Kyoto. It was so fantastic. Talking about history, every time when the conversation changed to the topic of the World War, there was not a single word from any of my Japanese friends, just the deep sad pain in their eyes. Wounds are also another side of Japanese culture for me. The failures made this country grow strong, and the Japanese economic situation nowadays can prove this word very well. I appreciate Japanese spirits. Even though now they do not have swords on their waist anymore, but Japanese people are still real samurai.

The days passed so fast, not very long, I found out that the cold winds were blowing against my window. It was winter. The white frosty snow started to cover every single inch of the ground. The girl who came from the dreadfully hot country like me began to hibernate – by getting stuck in the warm room and doing nothing other than eating and sleeping. Therefore it was the season of watching movies for me because I had too much free time. This is the reason why I am addicted to Japanese movies and TV programs now.

The latest movie that I watched was “*ima, ainiyukimasu*”. It is one of my favourite movies presenting the love among family members and the meaning of life. In my opinion, due to the books, dramas and movies that I watched, I think these days a lot of Japanese people are getting lost in the society that moves like the river flows. They want a lot of money. They use brand name bags. They work hard until late at night. They get drunk with someone they call friends. But they go back to the empty home. A lot of people do not know where they are going everyday or what life means. I saw one TV program that talked about one Japanese girl who ran away from her house in the countryside and worked in a “host club” in the city. It was a real sad story. For this all, at first, I thought it was because they forgot their true Japanese hearts. But after New Year's festival in the university campus, my thinking changed. I saw old people teaching

young foreigners and Japanese how to make mochi. Some taught us *karuta*, the traditional Japanese card game and *kendama*. Some gave us hot *zoni* which is the special soup for New Year. The hot soup warmed us from our mouths to our hearts. I thought that maybe they did not forget, but because they were trying so hard to follow the things they thought they missed, so they could not notice the beauty of trees on the street they were walking along like before. Actually, the trees were still there, but they just could not be easily seen anymore.

Because Beppu, where I have been living in, is very famous for natural hot-springs. It is not acceptable to miss the warm healthy bath in the freezing wintry weather. Over there, I found out a very interesting fact that Japanese people love taking baths. They spent a lot of time cleaning their bodies and scrubbing everywhere, and then I saw them get into the hot water and then showered with cold water and then hot water again and cold water again. It seemed like endless bath-taking for me. But I think it was also a very charming part of Japanese culture.

The cold freezing winds in winter were replaced with the cheerful songs from the colourful little birds in spring. It was the season of births. Everything came back to life. The warm tender sunshine melted down the white snow softly. Colourful flowers began to bloom. Also, the people around me started to change; they threw away their dark heavy weight clothes to the sweet light weight dresses. Not very long after spring started, there was the news that everyone was waiting for – the beginning of cheery-blossom or sakura bloom. The garden was painted with the romantic pink colour all over. You can see people drinking and dancing under the attractive pink trees. It looked like they were celebrating for the new season. When I looked around I could see smiles and laughs on people's faces. I truly love to sit under sakura trees watching the pink sakura storms bringing the happiness to people's lives. And, again the products changed into the picture of sakura everywhere.

“Kaze ni tomadou yowakina boku...” I sang a song called “tsunami” in karaoke with my friends. Or do you think I should sing “Sakura Sakura ima sakihokoru...” by Moriyama Naotaro instead? Maybe yes, the sakura song is really matched with the sakura garden that time. Not only the products that changed into sakura images, but also the music. There were a lot of sakura songs, but I like this song the most because the meaning of the song suited the atmosphere at that time. In other words, sakura bloom was also the symbol of farewell. School graduations are mostly held in this sakura-blooming season, so another scene that we can see under sakura tree is graduated boys and girls writing friendship books or exchanging their school uniform buttons.

Last spring, I took my parents to travel in Tokyo. It was extremely busy there, and everyone seemed to walk non-stopping to somewhere. This city represents modern Japan with tall buildings, sassy fashions, high technologies and more. I think this is one of the fanciest cities in the world. Anyway, doesn't it sound like a very material city? I don't think so. On the day that I planned to go to Disney Land, I could not find the place to get Disney Bus. We got lost in Shinjyuku. I asked so many people but I was still confused because of the language and the complexity of the roads. The people there were very kind, and they tried so hard to tell me where to go. One of them took me to the bus stop and this really impressed me. People there planted flowers in my heart like the spring season.

In summer and winter, the temperatures are absolutely different in Japan. Not only the changing of temperatures means the changing of the seasons, but also a lot of different stories happen in each season which contain the very vital keys to Japan. Summer, fall, winter and spring are the words that mean a lot in Japanese culture. These four seasons turn over and over again, something begins, and something ends. But I believe that as long as we have seasons on the earth, these four seasons will go on continuously in Japanese culture and souls.

The Value of a Human Being



David C. Moreton

Recent events in my life and in the Japanese media have led me to consideration of our treatment of each other as fellow human beings. TV and newspapers tell us of child abuse, murders committed by children, corrupt companies and scam artists. And in my own life, reading through my grandfather's diary which describes his experience as a Japanese POW during World War II and continuing my research on the Shikoku Pilgrimage route, I have begun to compare the ways people treat each other and themselves.

I sometimes wonder where equality and respect have gone. Do people value others or themselves anymore? While it is perhaps relatively easy to attach a value to an inanimate object, such as a used car or new TV, what is the value of a human being? How much are we worth to each other? It is clear that some people treat others as if they have little or no value, and do not hesitate to destroy another person's life whether that destruction be physical or mental. What then, is our value? Where or how can we learn about our own worth? Where can we find total acceptance – a place where one can be accepted as an equal and treated with respect?

Between February 1942 and August 1945, my grandfather, as a British soldier, was a Prisoner of War under the control of the Japanese. He was one of hundreds of thousands forced to build the Taimen Tetsudo – the 400-kilometer railroad from Thailand to Burma. During his internment he kept a diary in secret and this document records details of his day to day life, the conditions of the camps and fellow prisoners, the treatment received by the Japanese, and his thoughts about his captors. One entry

written after the war states:

“A year ago I was still a prisoner and during this month we moved with 500 men up to Krain Krai – what a nightmare! The wet, the mud, filthy clothing, sweating bodies, mosquitoes biting hard as we lay like sardines in the railways tracks trying to sleep, the look of last hope in men's faces as they returned from work after marching back barefoot. But always the hope that we were going to win.”

Conjuring up this image makes me feel so sad about the conditions he and others had to endure for so long. As well, he suffered from diarrhea, beriberi, malaria, dengue, goiter and dysentery as well as having various teeth pulled, numerous blood transfusions and an appendix operation. His diary, like many others, describes the cruelty of the Japanese and how the Allied POWs and local coolies were treated as subhuman – worthless objects that deserved to be (and were) worked to death. However, his journal is not entirely bleak. He does offer examples of some Japanese who spoke words of compassion or those who treated him as something of value. For example, in early 1944, he wrote that a Japanese doctor said, “In one year the fighting will stop, so you must look after your health to go home to your wife and children.” In May 25, 1944 he was told, “Most of the Japanese troops are fed up with war and want to return home just as much as we do.” We can only guess at how these words encouraged him to persevere. He must have appreciated hearing such words in that world of gloom - to be treated, even momentarily, as something of value.

An interesting similarity between my grandfather and I is that neither of us chose to begin our experiences with the Japanese. And yet we both felt that most Japanese

would never treat us as equals or with full respect. I spoke about such feelings more than a decade ago at a Japanese Speech Contest. The title of my speech was, "The Value of a Human Being." At the beginning of my speech I related an experience I had at a Science Center in Vancouver where there was a most unusual weight scale. When one stood on it, the machine determined according to one's weight, one's worth in society based on the amount of materials such as calcium, water, and minerals in one's body. The machine said I was worth \$5.00 or about 500 yen! I was shocked. "Is that my true worth?" I asked the audience. In the rest of my speech, I urged people not to judge, or determine someone's worth, by skin color, nose or feet sizes etc but to move past the physical features and get to know others as fellow human beings. I also mentioned that, at the time, I felt that Japanese did not seem to accept me into their circle, that I was always regarded as a tall nosed, big footed Caucasian, in other words, a *gaijin* – someone from the `outside world.` However, I am glad to report that this feeling did change and, over time, I felt that `wall` between us dissipate.

However, too many people, especially those I meet for the first time, determine my value because I am Caucasian – in their eyes probably American – and thus a speaker of English. It seems that my existence as someone who can speak English is of more worth to them and so I am treated as `someone to practice my English on` more than as a fellow human being. On some occasions when I have been by myself looking at books at a bookstore, sitting at a café, waiting for the light to change or going grocery shopping someone has approached me and has asked me one of the following questions: "Are you American?" or "Where are you from?" or "Do you like Japan?" For my first couple of years, I answered politely in English to them, but that lead to more questions. I become trapped in an interrogation of sorts. Now when this happens, I often reply in Japanese asking the questioner a question. I notice this does not occur with non-Japanese

who are not Caucasian? Why is this? Are Caucasians worth more in the eyes of Japanese? Is being a native speaker of English more valuable?

We must remember that treating others with worth does not only occur between people of different races and countries. In my grandfather's diary he writes, "This imprisonment has showed me the real character of men among themselves, cheating each other and trying to get more than the others seems to be the order of the day." He is describing the behaviour of English soldiers. He also writes of a time when he saw sick Japanese soldiers coming back from the Burmese front who were mistreated and ignored by others in the Japanese army. In society today, there are many instances of similar behaviour. For example: bullying, children 'losing it' (*kireru*) or abuse (*gyakutai*). All these problems are constantly on the news and I wonder why there are so many cases now. Why are people treating others with such little respect or value? One proposed hypothesis is that children who play violent video games can no longer distinguish between the game world and the real world; they quickly become irritated and are numb to violence. I was most surprised to see in one questionnaire, conducted among elementary school children, that almost one in five students believe that if a person is killed s/he can come back to life! "Just press the reset button and start over."

Japan has a long history of ostracizing minorities, the disabled and the diseased. During the early 1990s, I had the opportunity to do volunteer work with disabled children. We had weekend playtime at a nearby kindergarten, held summer and winter camps and other activities. It was a pleasure to participate in various activities with them but, when we traveled outside the relatively private temple compound, I was always interested to see how other people looked at us critically. Their looks and their actions demonstrated our worth to them. However, over the past decade, it is wonderful to see that people's attitudes are changing and not only

disabled people but others considered to be outside on the fringe are now being accepted as part of mainstream society.

While treating others with respect or as something of value, we must also consider how much we are worth to ourselves. It disappoints me to see on TV and to have talked with various females – students at the schools where I have taught - who, in order to obtain material goods, work at night mainly for the entertainment of men – whether it is just being a companion or hostess, one who pours drinks and keeps a man company or one who does even more. It is sad to see this booming business where men pay hundreds or thousands of dollars for a bottle of wine and openly flirt with the women there. And men spent even more money to buy gifts for their girls. It is unpleasant to see that both the women who work at such places and the men who frequent them appear to have lost their sense of values.

It seems that for many years, people have focused more on `mono` (physical or material things) than `kokoro` (heart). As a result, during the bubble period of Japan and even today to some extent, people determine their own and other's value by the brand goods they have and/or wear. Haven't we know all known or seen someone in Japan who has a fetish for a certain brand name? Someone who feels worthless without such goods? Or don't we often see on TV rich people being highlighted with all of their goods being shown off? It is clear that the media has a strong influence on how we think and how we value others. The end of the bubble may have brought a close to the overflowing world of extravagance, but even today some women still want or need that Gucci bag or Rolex watch and to obtain it take on companion jobs and the like to make a quick buck, not considering their own personal worth. It amazes me that, despite Japan being a predominantly Buddhist country, the Japanese do not exhibit one of the fundamental Buddhist tenets – that is, of non-attachment. People want to be attached to fancy cars,

big homes, various goods, and this determines how they will be valued by others around them.

We must ask ourselves if there is not a place in Japan where anyone – whether Japanese, non-Japanese, disabled, female etc are accepted as equals, where one is valued as a fellow being or where there is a focus on the heart and not on material things? I think the answer is the Shikoku Pilgrimage route. This 1,400 kilometer pilgrimage which goes around the island of Shikoku in a circular route consists of 88 official temples, 20 non-official temples and hundreds more sacred sites. It is said to have been founded by Kobo Daishi (774-835), the 8th Patriarch of Shingon Buddhism. The earliest history of this route is unclear but since the 17th Century the number of pilgrims has continually increased. Today, it is said that approximately 150,000 do the pilgrimage annually whether by foot, bicycle, skateboard, car, or bus. In the past, there was even a helicopter pilgrimage tour available! What is the attraction of this route over other pilgrimage routes in Japan, such as the 33-temple Saikoku, 34-temple Chichibu or 33-temple Bando routes?

In 1999, I began researching the Shikoku Pilgrimage route for my Master's thesis, "The History of Charitable Giving along the Shikoku Pilgrimage Route." Charitable giving is the phrase I have used for o-settai which is a gift, whether it be something tangible, for example, money, food or clothing or something intangible, for example, not having to pay for a temple stamp or place to stay, assistance in some way or some act of kindness to a pilgrim. This differs from the word settai, normally thought of in society, which is the action of providing food and entertainment for one's advantage. For example, a company will take a client out to lunch and perhaps offer entertainment in the hopes of continual partnership. I have found that this pilgrimage welcomes all, that o-settai is provided indiscriminately to all pilgrims, that many people who do the pilgrimage discover their own true worth, and that many people learn to how to live without

`mono` and to focus on `kokoro.`

Let me explain in more detail. First of all, there is acceptance. Over the past few years I have met approximately a dozen non-Japanese who have done the Shikoku pilgrimage. Their experiences along with my own, have shown that the people of Shikoku do not treat a foreigner with apprehension, do not show any discomfort in associating with them, nor use them as `English practice boards.` Once one dons the pilgrim attire, one becomes a *o-henro-san* and loses one's identity. This is the same for Japanese as well. There is a story of an elderly Japanese pilgrim who was a `life pilgrim` who continually went around Shikoku living mainly off the generosity of the local people through their giving of *o-settai*. Along his journey, he created haiku poems which caught the attention of the media. Reporters went to interview this man and his story appeared on national TV. A police officer saw the program and realized that the man was wanted for a crime committed many years before and as a result, he arrested him, thus ending his peaceful existence on the pilgrimage. However, the local people did not care about this man's background. They valued him highly as a *henro* and willingly and constantly provided *o-settai* to him. Another example, is people with Hansen's disease or leprosy who until recently were not recognized as members of society and were deemed sub-human or worthless. Since the Edo period – more than three hundred years ago – such people were ostracized, sent out of their villages and forced to live in places set aside just for them. It was clear that the feeling was, “Out of sight, out of mind.” However, one place that such people could go was Shikoku where they could freely participate on the pilgrimage. They were accepted as pilgrims.

Let me return to the custom of *o-settai*. Most people who come to Shikoku – whether Japanese or non-Japanese – are most surprised at this tradition. In other areas of Japan, this practice existed in the past but disappeared over time with modernization and commercialization of

the pilgrimage routes. However, in Shikoku, due partially to the belief that when one gives to a pilgrim one is actually giving to Kobo Daishi, this has continued strongly for more than three hundred years. One day this April, I walked part of the pilgrimage trail in Tokushima from Temple 11, Fujiidera to Temple 12, Shosanji with two Americans. When we reached the bottom of the mountain a woman came out of her home and handed us dried yams. Further along, we met a man who invited us into his house for tea. We sat in the *genkan* at a small table and looked out over the valley in front of us. However, what shall I remember most from that visit was his telling the story of seeing hundreds of B29s flying over the valley on their way to bomb Tokushima. He also talked about the many men in his village who were sent to Burma to fight during World War II and how so few made it back. His stories reminded me of my grandfather and his experience. I think, “War – why does it occur?” There is only pain, suffering and death on both sides where so many people are treated as worthless objects. And yet this man willingly opened his home to three foreign pilgrims offering what he could and talking with them – not caring what nationality they were, what their past was, their social status in the `real` world nor how much material wealth these visitors had.

The culture of the Shikoku Pilgrimage where all are treated equally and all support each other with respect is something I think we need to examine. Recently I have noticed that disabled people, foreigners, *hikikomori* (those who seclude themselves from society), those looking to find themselves, those looking to get away from the materialistic society, those wanting a simpler existence, those wanting to find their own worth are coming to do this pilgrimage. What makes the route so special? To me, the custom of *o-settai* will humble one, the concept of camaraderie – people sharing the same goal – will encourage one, and the ability to travel without an identity will appeal to most people.

Your chemical value may indeed be only 500 yen. But the pilgrimage will teach you your true worth, as well as the worth of others although they may be different from

Japan: An Inward Journey

Coming to Japan, the land of the rising sun, became a significant turning point in my life. Before coming to this island, one of my best friends who lived in Kyoto, said to me, “Japan leaves no one untouched”. In that moment, I didn’t quite understand what she meant, but the passing of time has helped me comprehend the meaning behind these wise words. I have spent my early adulthood in Japan contemplating my life as it grows with meaning day after day.

Landing in Japan from a Latin American country was an experience filled with shock, not only cultural, but shock in every thinkable sense that the word connotes. As the romantic that I am, I came to Japan initially in search of the Japanese *kokoro* as depicted by Lady Murasaki forgetting that other Japan responsible for electronics and Candy Candy and Pokemon cartoons. The conciliation of the different images of Japan that I had in my mind and in my heart required my undivided attention during early mornings spent in contemplation. During my first few years in Japan, this country and its people revealed itself very slowly. Layer after layer unwinded. The Japanese *kokoro* laid too deep to be understood without the aid of time.

When I first arrived in Japan and encountered the chaotic and at times kitsch city of Tokyo, I was not able to see these ideals that I had so much read about nor was I able to see that superb simple sense of beauty that Japanese people so carefully guarded. As foreigners, we often come to this country with the image of that classic

you. In other words, you will learn the value of a human being.



Irene Herrera

Murasaki-like Japan only to find that indeed hundreds of years have passed and Japan has changed. The big cities no longer hold a *wabi-sabi* aesthetic feel but are rather crowded with sparkling neons. People living in Tokyo never seem to actually have time to observe, to feel present, on the contrary, they seem to always be in hurry and never have time for themselves. Seeing salary men spending their free time unloading stress by drinking a lot of beer, awakened compassion in me as I felt their loneliness and their need to escape. This was one face of Japan, but not the face that I wanted to learn from. I figured that by studying Japanese religion and philosophy perhaps I could find a more meaningful approach to life.

It is in this manner that my admiration of the ideals voiced by Japanese Zen masters such as Dougen truly became more fervent as *zazen* helped me feel at ease with the loneliness I at times encountered in Japan being far away from my family. After studying *zazen* in Sojiji Temple all these years, I am capable now of feeling richness in the emptiness. This lesson could not have been learned anywhere else.

I remember the first time I went to see my mother after having spent a year in Japan, she highly praised the changes she had seen in me. The words she used were “You have become more Zen”. At the time, I just laughed and didn’t pay too much attention to her comment, however, mothers seem to know about their kids what the

kids themselves don't know. I had indeed been contaminated with a more serene state of mind. However, I still felt conflict within myself. I was having an identity crisis.

When I saw my first *hanami*, I was amazed by the fact that Japanese people were so excited about the blossoming of the *sakura* trees. After two years in Japan, I began to notice the blossoming of the *ume* flower, which I actually liked even more than the *sakura* because it adverts the end of the winter and the coming of spring. Once the *ume* flowers in my backyard blossomed, I knew the winter was almost over. This second year, my mother came to Japan and had the opportunity of seeing the *sakura* in the spring in Kyoto, specifically in the *tetsugaku no michi* and in Miyajima. My mom confessed it was one of the most beautiful revelations of nature she has experienced in the past years of her life. We spoke about how Japanese people admire the ephemeral nature of the elements created by God as they appreciate the blossoming of such beautiful flowers and mourn that they will soon be gone. The philosophy of *mono no aware* is unique to ancient Japan and it is one of those things that no matter how much Japan can seem to change on the surface, it is still there, latent within the people of this country. On the other hand, Venezuela, my home country, does not have seasons; it is sunny all year round, causing the perception of time to be different. Therefore whenever I see the changing of the seasons in Japan, I think about the changing of time with acceptance and attention, letting go of the past and the thoughts of the future, to simply embrace the eternal present.

Something so subtle but so important as the perception of time, triggered inside myself an identity crisis provoked by having come into contact with Japanese culture, a culture so different from my own. I began to realize that values highly estimated within my culture are not necessarily highly estimated within Japanese culture. One of the few things that impressed me about Japanese people

was their politeness. In my country we tend to be polite in a discriminating fashion, only to people we like, while on the other hand we tend to be more aggressive to those that we don't like. Japanese indiscriminating politeness made me feel well liked as a foreigner, however, I soon realized that this politeness at times hides true feelings. Understanding *honne* and *tatemae* is probably one of the most difficult tasks any foreigner has to encounter. In Japan I have often felt that I have no idea what people are thinking when I talk to them, perhaps because it is not so common to show what you are feeling with facial expressions or perhaps because as foreigners we are not accustomed to reading this subtle facial language we encounter when landing in Japan. Japanese people seem to sustain more subtle codes of communication, where words do not hold importance, where perhaps actions speak louder than words, where consideration for others sometimes holds you back from expressing in a direct manner what you feel. On the contrary, Latin Americans tend to be very direct people who express themselves spontaneously, sometimes without realizing that their words could be affecting the listener's feelings. In the eyes of a Japanese person this attitude could seem quite egotistical. Latins watch out for themselves more than for others, while in Japan people think about the other before they think about themselves. Although the Latin approach can be healthy to the mind it is not healthy to the other person. On the other hand, the Japanese approach can sometimes result in the unhealthy bottling of feelings and in *gaman* but at the same time demonstrates consideration, *omoiyari* or *enryo*.

For example, in Caracas, the city where I was born, in order to survive you need to adapt yourself to the city's chaotic atmosphere. It is a place where the Darwinist principle of "the most adapted, the most evolved survives" is materialized. At times you find yourself angry because someone has cut in front of you while cueing to go to the bank or to go to the bathroom. You need to stay awake and be aware of your surrounding because rules are easily

broken. On the other hand, in Japan if you break a rule you turn into a pariah. In Venezuela if you break rules to get what you want, you are considered socially smart.

When encountering a society as an outsider there are always things that you see that people immersed in the same society to do not see so clearly. Seeing Venezuela from Japan has given me another perspective on my own culture the same way that seeing Japan as an outsider has. I believe that all Venezuelans need some *Japaneseness* and all Japanese need some *Venezuelaness*. Work ethics differ from country to country. For example, Japanese people have stern work ethics while Venezuelans believe that life doesn't have meaning if you are always working and don't set aside enough time for fun. Venezuelans are constantly in need to communicate what they feel, Japanese people often don't. At the same time, Venezuelans don't always listen because they are always talking while Japanese people are avid listeners. These are the times when I think that making a balance between these opposite characteristics has given me an understanding of who I am and who I want to be.

When I have parties at home and invite my Japanese friends and Latin American friends over, my Japanese friends are always thrilled to see how Latinos behave at parties. Their warmness, openness, the dancing of salsa and merengue are some of the things that fascinate them. My Japanese friends feel embarrassed at first but soon find themselves saying hello to everyone by kissing them on the cheek and not hesitating to touch each other fondly. In Japanese society body contact is not as well seen as it is in Latin American societies where we are constantly touching, holding hands and hugging those people we love. It does not mean that Japanese people do not love in the same manner but there is clearly a difference in the way these feelings are exteriorized. In my country, we find console in saying to each other that we love each other quite often. I have heard from my Japanese friends that they find it strange that I say to my mom I love her every

time I talk to her on the phone. I simply respond that it is natural for me to let my mom know that I miss her and that I love her specially now that I am so far from her and I don't know what circumstances tomorrow may bring. I also love to hear sweet words from her. In Japan, when my homestay family says to me, "*Irechan ni aitai*", I know that this is their way of saying that they miss me and they want to see me soon. When I visit them and find they have prepared for me special Japanese dishes, I know their way of expressing warmness and showing they are fond of me is by spoiling me.

All the differences between my own country and Japan have served to give me a broader perspective on the different values of each culture. Although we are living amidst a civilization on the verge of globalization, this concept seems to apply to our physical bodies only. We are able to be transported from country to country and exchange different cultural, food and clothes products, however, in our heads, we still feel intimately close to those values bred in our own culture and hold them as truths. It is not until we encounter a culture different from ours and observe these new values that we realize we are being offered the opportunity to embrace new values. It is in this manner, that I came to Japan and began to walk on the path of auto-contemplation by questioning the values of my own society and absorbing from Japanese those values that I admired. I began to learn patience, tolerance, *gaman*, humbleness, a stern work ethics, punctuality, consideration for others, selflessness and learned that not necessarily my own opinion is the only opinion and that imposing myself to be the center of attention is not as positive as I used to think. There are moments for embracing silence and not speaking out loud. There are moments for expressing ourselves in a subtle and delicate manner. There are moments where actions speak louder than words. There are moments when it is beautiful to watch a sunset in silence. These things I have learned in Japan.

No matter how many years have passed since the last samurai cried out loud protecting the uniqueness and purity of Japanese culture, after living here I happily realize that these values are still present in today's modern life, like an underlying river current underneath an agitated surface. I have to admit, however, that I feel the omnipresence of these values the most when I interact with older people. They are proud of their values and have embraced them sincerely.

I am grateful that my stay in Japan motivated my inward journey; for it is here that I have found my treasure, it is here where I have found myself. In Japan, I learned what I lacked. Japanese culture being opposite from my own culture served as a complement to who I am. I grew as a person and began to walk on the *hito no michi* liberated from fears. Taking the best from my own culture and from Japanese culture, I feel I have found a harmonious balance. What began as an identity crisis turned out to be one of the most valuable lessons I have learned in my 29 years of life. My initial fear of coming –literally– to the other side of the world has dissipated because I have found in Japan my third home, after Venezuela and the United States,

where I grew up.

The country that cradled Zen Buddhism gave me the unique opportunity to come closer to this religion, philosophy and way of life, to study the way of tea, aikido and other arts unique only to Japan. Being between two cultures has become a challenge. I have grown quite a bit in the past five years and have realized how we as human beings can be strongly molded depending on the society we grow up in. The beauty of traveling and experimenting with other cultures has given me the opportunity to realize that the only truth is love and understanding. And it is with these eyes today that I embrace Japan and thank this island and its people for all the knowledge they have provided in the past years of my life. I know I will always look back at Nihon with a nostalgic heart filled with admiration as a place where I found my treasure, as a place where I lived wonderful, joyful, fearful and lonely moments but at the end it all amounted to who I am today. I am thankful for having learned that heart, soul and mind are all the same and if we approach our inner essence with honesty we will be able to be happy and share this happiness with others.

当協会の運営を支えてくださっている団体・個人の方々

法人維持会員（一口50,000円/年）

(財)池坊華道会 京セラ株式会社 (株)京都銀行
(株)京都新聞社 京都信用金庫 村田機械株式会社
裏千家今日庵 サントリー株式会社 オムロン株式会社
(株)淡交社 表千家不審菴 (株)ワコール
ガリオア・フルブライト京滋同窓会 佛教大学
京都外国語大学 (株)松栄堂

(敬称略・順不同)

個人維持会員（一口30,000円/年）

西島 安則 猪野 愈 梅原 猛
北川善太郎 児玉 実英 森 金次郎
玉村 文郎 富士谷あつ子

(敬称略・順不同)

一般会員（一口5,000円/年）

鶴屋 吉信 国立京都国際会館
赤堀 晴美 田附 房子 畑 肇
林 正 川島 良治 加藤 邦男
日高 敏隆 嶋本 幸治 横山 俊夫
浅野 敏彦 乙政 潤 名倉美津子
加藤 剛 水谷 幸正 糸井 通浩
海田 能宏 牧田 正大 山本 祥子
南 恵美子 小林 哲也 山本 壮太
加藤 久雄 那須 秀廣 井上 章子
中村 皓一 大泉智賀子 竹澤 雅子
平佐 聖子 辻 淳子 和田 好代
菅 泰男 金剛 永謹 影山 廣子
泉 文明 辻 加代子 西尾 節子

講座受講生の皆さん、日本語教師一同、スタッフ

(敬称略・順不同)

本誌には再生紙を使用しています。

Our NEWSLETTER is printed on recycled paper.

協力者

いけばなインターナショナル 石原栄都子
田中 里枝 藤田 榮一 片山 和子
井上 栄子 石田 紀郎 二股 茂
安間てう子 Pieter de Ganon (敬称略・順不同)

特別プログラム後援

京都府 120万円(国際交流講座・国際文化講座・
エッセーコンテスト)
京都市 42.5万円(国際交流講座)
千玄室 100万円(千玄室交流プログラム)

編集後記

32号をお届けします。スタッフひとりひとりが原稿に頭を絞り、手書きやワープロ文書をWORD文書に編集するまでが2ヶ月。完成ファイルを印刷屋さんに預けてからは、校正を経ても納品まで1ヶ月かかりません。技術の進歩を甘受しつつ、この1年、当協会の事業をご支援くださった方々との絆を再確認いたしました。

4月に独自ドメインと同メールアドレスを取得しました。皆様に親しんで頂けますことを願っております。

Dear Readers,

We are a non-profit organization working for a better communication between the Kyoto citizens and visitors from abroad. For further information, please call our office:

TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006

E-mail office@kicainc.jp

URL http://kicainc.jp/

Kyoto International Cultural Association, Inc.

Rm116 Kyodai Kaikan

15-9 Yoshida Kawahara-cho

Sakyo, Kyoto, 606-8305 Japan